

青森市「藤田組通り」の名称由来

島口 天¹⁾

Origin of Fujitagumi-Douri in Aomori City Takashi SHIMAGUCHI

Key words : 藤田組通り, 青森電鍊所, 藤田組製材所, 荒川勇造

1 はじめに

青森市の港町から山手（南方）へ延びる片側2車線の道路は、通称「藤田組通り」と呼ばれている（図1）が、その名称の由来はよく知られていないと思われる。

筆者は、青森市東部の東岳における鉱山史について調査を行った際、東岳で大正3年（1914）～昭和34年（1959）に石灰岩を採掘していた同和鉱業株式会社（旧株式会社藤田組）が藤田組通りに何らかの関係があるのではないかと考え、並行して調査を進めた。その結果、大正11年名畑商店発行の「実地踏査青森新市街図」の相馬町（現・港町3丁目）に「藤田組電鍊所」が記されていること（図2）を確認し、それは大正7年に新設され同9年に閉鎖された藤田組の「青森電鍊所」（佐藤，2007）であることが考えられた。しかし、電鍊所がどのような目的で設置され、東岳の同和鉱業野内採石所と関係があったのかは不明であった（島口，2011）。

本報告では、その後の調査で明らかになった藤田組「青森電鍊所」の詳細について記載し、「藤田組通り」の名称の由来を考察する。

2 株式会社藤田組の概要

株式会社藤田組について佐藤（2007）を元に述べる。

株式会社藤田組は、昭和12年に合名会社藤田組と藤田鉱業株式会社の合併により設立され、昭和20年に商号を同和鉱業株式会社に変更、平成18年に商号をDOWAホールディングス株式会社に変更して現在に至る。

合名会社藤田組は、明治9年に組織された藤田傳三郎商社から始まり、同14年に藤田傳三郎ら三兄弟の共同出資の組合組織の藤田組に改組され、同26年に商法の整備に伴い組織改正した会社である。大正6年に鉱山部門を藤田鉱業株式会社として分離したが、上述の通り再び合併して株式会社藤田組となった。

明治12年末に鉱業に進出し、同17年には明治政府から秋田県の小坂鉱山の払下げを受け、本格的に鉱業に取り組むようになった。

3 青森電鍊所の設置目的

藤田組「青森電鍊所」については、同和鉱業株式会社（1985）に『折よく（第一次世界）大戦の好況期で、事

業（電気炉における合金鉄の製造）はすこぶる順調に発展し、合金鉄のほかに電気製鋼と低燐銑の製造にも手を広げ、（大正）7年1月には青森電鍊所、同年9月には伊達電鍊所（福島県）を増設するにいたった。』という記載があり、参照表には青森電鍊所の電気炉について『型：エルー式（開放）、容量：500kw、数量：2基、用途：合金銑・低燐銑（大正7年9月現在）』と記載されている。また、関連事項として『合金鉄事業と関連して付記したのは、その前後、青森県下北半島・大畑から東通にかけての1帯に、41鉱区2000万坪（6612ha）を超える広大な砂鉄鉱区を獲得したことである。』という記載がある。

藤田組が下北地域で砂鉄の採掘を行った記録は、竹内・南部（1953）にも『大正8年、藤田組は釣屋浜に選鉱場を設けて二枚橋の砂鉄を採取し、関根浜にも同様の操業を行い、2年間に約2,000tの精銑を得て青森の藤田組精鍊所に送ったと言われる。』と記されている。

これらのことから藤田組「青森電鍊所」の設置目的は、下北地域で採掘した砂鉄から2基の電気炉を使って合金鉄および低燐銑を生産することにあったことが分かる。

青森電鍊所に設置されたエルー式電気炉は、アーク放電という放電によって生じた大電流を電極から原料に直接流し、放電熱によって原材料を溶解する電気炉である。そのため、かなりの出力を持つ発電所を自社で保有するか、発電企業と提携する必要があったと思われる。

青森市（1958）によると、青森市では明治30年に青森電燈株式会社が、小規模な火力発電機で発電した電気供給を開始した。やがて電力需要の増加に伴い、火力から水力に切り替える必要性が出てきたため、同37年に下松沢発電所を完成させた。さらに、大正3年に大不動発電所、同4年に寒水沢発電所・矢別発電所、同5年に上松沢発電所と次々に増設した。

青森市に電鍊所が設置されたのは、このような水力発電による電力を確保できたためと考えられる。

4 青森電鍊所が設置された背景と閉鎖理由

藤田組によって青森電鍊所が設置された背景について佐藤（2007）を元に述べる。

合金鉄は鉄鋼の原料であり、高品位の合金鉄は電気炉

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）

でなくては生産できず、明治時代、その供給は海外に仰いでいた。大正3年に始まった第一次世界大戦により欧米からの合金鉄の供給が途絶え、艦艇建造用の鋼材の原料の合金鉄の入手が困難になった海軍から藤田組に合金鉄の供給をできないかという示唆があり、藤田組は同4年に合金鉄の生産への進出を決定した。

明治末期の藤田組は産銅業が主要事業だったが、大正時代にかけて亜鉛、アルミニウム、ニッケルなどの製錬へも進出していた。また、将来的に製鉄業へ進出する前提として、合金鉄の生産を行うことや鉄鉱山の確保という構想もあり、同4年に合金鉄の研究を始めたのである。そして、同5年には福島県の広田製鋼所で合金鉄の生産を始め、同7年から電気製鋼および低磷銑鉄の生産にも乗り出した。さらに、この年には青森電錬所、宮城県の伊達電錬所を増設し、合金鉄および銑鉄を生産した。また、鋳鋼と鍛鋼は大阪の西島工場でも生産した。青森電錬所の生産実績は、同7年2月～同9年8月の期間で合金鉄および銑鉄 1,500t であった。

藤田組は、国産の鉄鋼の供給のため青森県下北半島の鉱区を含め、全国で70箇所の砂鉄鉱区を第一次世界大戦期に取得した。下北半島での砂鉄鉱区の取得は、合金鉄の電気製錬には砂鉄が適しているという見込みがあつたことだったが、実際には不適であった。また、生産原価が高いという理由で、砂鉄の主要な需要者であった広田製鋼所を売却してしまったため、砂鉄を利用する方法がなくなった。

青森電錬所が設置から2年で閉鎖された理由は、大正7年11月に第一次世界大戦が終結したことで合金鉄需要の減少が見込まれたこと、砂鉄が合金鉄の電気製錬に不適であったことが考えられる。

5 青森電錬所はどのような建物だったのか

大正11年名畑商店発行の「実地踏査青森新市街図」に記されている「藤田組電錬所」の場所には、その後に発行された市街図に「藤田組製材」と記されるようになる(図3・4)。

肴倉(1953)には『(藤田組工場は)現在は荒川産業株式会社と改称し、製材業が本業になっているが、大正8年藤田組が下北の鉱石を運んで精錬した場所である。藤田組の精錬所が建ったとき、田地に砂を相馬町海岸から運んだ』と記されている。また、青森民報社(1958)には『藤田組の砂鉄電錬所も不況のため転業してその一部を藤田組製材所として工場を活用した』と記されており、電錬所の一部が製材所になったことが分かる。

この製材所は、青森市(1958)に記載のある「合名会社藤田組製材所(創立年月:大正8年10月、代表者:荒川勇造)」と思われ、その後、製材業の荒川産業株式会社(昭和25年設立、社長:荒川謙治)へと引き継がれたようである。

電錬所の写真等は見つかっていないが、藤田組が小坂

鉱山に建設した電錬所はレンガ造りの建物で、現在もその一部が保存されている。小坂鉱山の電錬所では銅や鉛を精錬したということで、電気炉で合金鉄等を精錬した青森電錬所とは設備内容が異なるが、青森電錬所もレンガ造りの建物であったと思われる。

荒川産業株式会社の社長であった荒川謙治氏の御親族から聞いた話では、昭和43年5月16日に発生した十勝沖地震(M7.9)によって、荒川産業敷地内に建っていたレンガ壁が倒れる事故が発生した。このレンガ壁は高さ5~6mで家型をしており、国道側からも大変よく見えた。壁の海側には崩れたレンガが積み重なっており、壁は国道側へ倒れた。この事故については、東奥日報社(1968)に写真や記事が掲載されており、写真からかなり大きなレンガ壁であったことがわかる。

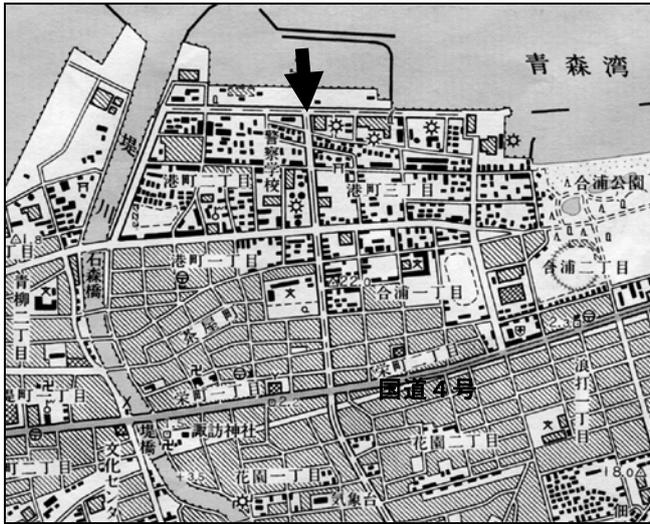
このレンガ壁が倒れる前の周辺地域を写した写真(図5)がみつき、中央奥に写っている家型をした建物がそのレンガ壁であることを、御親族と写真の撮影者に確認してもらうことができた。これからもレンガ壁は、周囲の家々や建物より高く・大きかったことがよくわかる。

このレンガ壁が電錬所の一部で、電錬所はレンガ造りの建物であったと思われる。

6 藤田組製材所の代表者「荒川勇造」

今田(1977)に『荒川材木店は市内浦町橋本小学校向側に店舗を設け、建築材、床板床柱、ベニヤ板、天井板、雑木類、柁類を販売し盛況を呈している。その取引は市内需要者は勿論、県内各地県外に及び、品質の優良と廉売を以て知られている。店主荒川勇造氏は多年藤田組支配人として製材界に重きをなした人で、後独立営業をなし今日に及んでいる。』という記載があり、藤田組製材所の支配人をしていた荒川勇造は、独立して材木店を開いたようである。このことについては、同じ今田(1977)の製材工場掲載欄に『株式会社藤田組長木澤製材所青森工場(所在地:浪打、設立年月:大正8年10月、工場主又は管理人:大瀧兵四郎)』という記載があり、藤田組製材所の工場名に「長木澤」と入っているほか、工場主が「大瀧兵四郎」となっていることから明らかだと思われる。独立した時期を知る資料はみつからないが、昭和13年版の東奥年鑑から会社広告欄に「荒川商店(浦町字橋本91,荒川勇造)」の広告が見られることから、それ以前であると考えられる。

製材界における荒川勇造については、青森市(1958)に、昭和7年に結成された青森県ヒバ材協会の県外移出部会の活動の一環として、藤田組荒川勇造青森製材工場主任が九州方面の木材市場へ出張宣伝したことが記されている。また、昭和17年に創立された青森県木材株式会社の取締役にも荒川勇造の名前が記載されている。これらのことから荒川勇造は、藤田組製材所の代表者(支配人)を務めていた頃から製材界の要職を兼任していたことがわかる。



500m

図1 藤田組通りの位置 (矢印の先、南方へ延びる道路)
(国土地理院発行の 1/25,000 地形図「青森東部」の一部を使用)

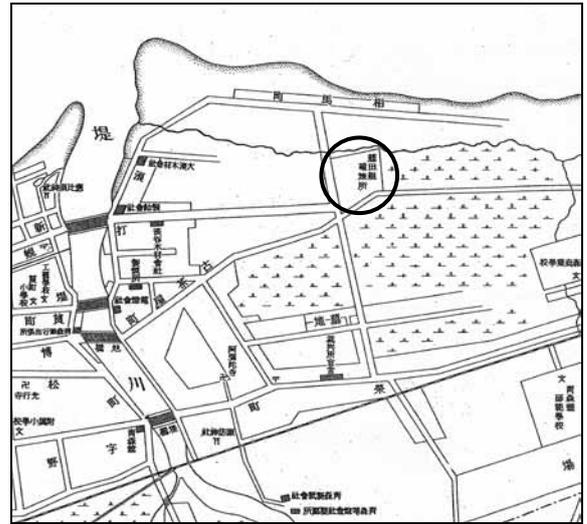


図2 大正11年の市街地図

(名畑商店発行の「実地踏査青森新市街図」の一部を使用)
中央上側に「藤田組電鍊所」(丸印)が記されている。
(青森市史編さん室蔵)

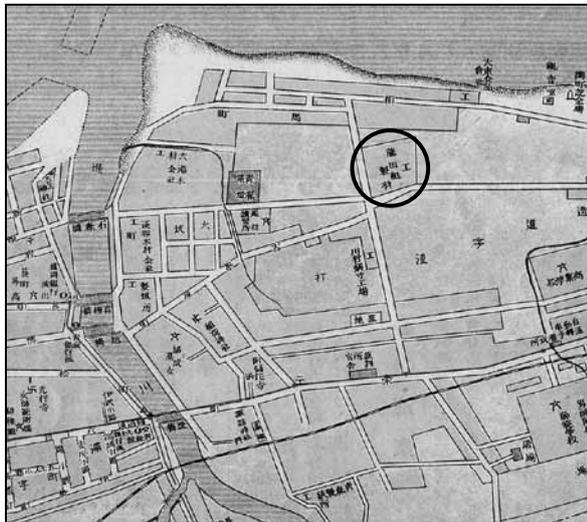


図3 昭和3年の市街地図

(名畑商店発行の「青森市街地図」の一部を使用)

図2で藤田組電鍊所があった場所に「藤田組製材」(丸印)
と記されている。

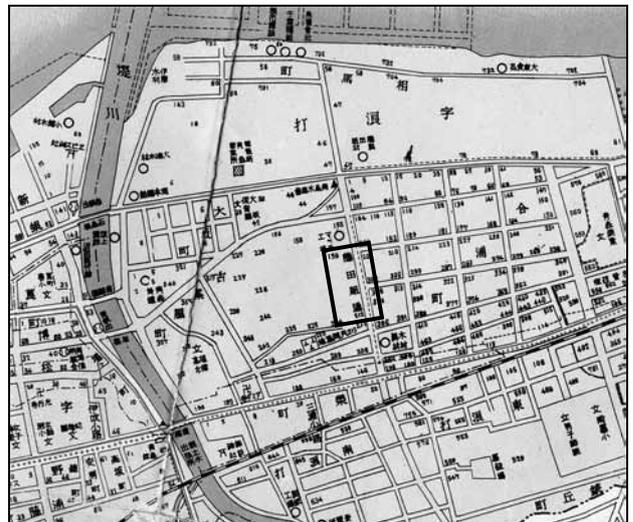


図4 昭和13年の市街地図

(木村文助発行の「新版青森市街全図」の一部を使用)

市街地図に初めて「藤田組通り」(四角)と記された。
(青森市教育委員会蔵)



図5 電鍊所の一部と思
われる家型をした大きな
レンガ壁 (矢印)。昭和
32年2月中旬、藤田組
通りの合浦小学校付近
から海側を撮影。

(安田城幸氏蔵)

7 「藤田組通り」の名称の由来

「藤田組通り」という名称が記されている初めての青森市街地図は、昭和13年木村文助発行の「新版青森市街全図」(図4)であり、その頃からそのように呼ばれていたと思われる。同図には、藤田組製材所が「藤田組製材」と記されており、この通りは国道以南にも整備・延長されている。当時、電鍊所がどのような状態で残っていたかは不明だが、少なくとも前述のように大きなレンガ壁が国道からよく見え、それは周囲の建物とはまったく異なる目立つ存在であったため、国道から海手に曲がる道路のランドマーク的な役割を果たしていたと思われる。このため、最初は「藤田組がある通り」あるいは「藤田組が見える通り」と呼ばれていたのが、徐々に「藤田組通り」と呼ばれるようになったと考えられる。

8 おわりに

今回の調査でも電鍊所と東岳の野内採石所との関係を明らかにできなかった。また、荒川勇造がどのような経緯で藤田組製材所の代表者になったのか、電鍊所で何かの役職にあったのかも不明である。これらについては引き続き調査を行い、併せて電鍊所の写真も探していきたいと思う。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、荒川直樹氏を始めとした荒川謙治氏の御親族、愛知産業大学経営学部教授の佐藤英達氏、小坂町観光産業課観光商工班班長の亀沢修氏、青森市史編さん室室長の渡邊薫氏、青森県立青森中央高等学校教諭の安田道氏、青森市在住の安田城幸氏には、関連資料及び情報の提供をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 青森民報社(1958)青森市制60周年記念「躍進の青森」青森市産業経済発達60年史。pp.40.
- 青森市(1958)青森市史 第五巻 産業編(下)。青森市史編纂室、図書刊行会、pp.672.
- 同和鉱業株式会社(1985)創業百年史。社史編纂委員会、pp.780.
- 今田清蔵編(1977)青森市誌。歴史図書社、東京、pp.200.
- 肴倉彌八(1953)青森市町内盛衰記。青森市町内盛衰記刊行会、pp.336.
- 佐藤英達(2007)藤田組のメタル・ビジネス。三恵社、pp.147.
- 島口 天(2011)青森市東岳における鉱山史。青森県立郷土館研究紀要、35、p.9-14.
- 竹内常彦・南部松夫(1953)下北地区。東北のチタン砂鉄資源、東北地方含チタン砂鉄調査委員会、p.23-44.
- 東奥日報社(1968)強震・青森県を襲う!! '68 十勝沖地震の記録。pp.120.

藤田組青森電鍊所に関するできごと(年表)

- 明治30年(1897)
青森電燈株式会社が、小規模な火力発電機で発電した電気の供給を開始。
- 明治37年(1904)
青森電燈株式会社が下松沢発電所を完成させる。
- 大正3年(1914)
第一次世界大戦が始まり、欧米からの合金鉄の供給が途絶える。合名会社藤田組が東岳で石灰岩の採掘を始める。青森電燈株式会社が大不動発電所を増設。
- 大正4年(1915)
合名会社藤田組が合金鉄生産事業への進出を決め、研究を始める。青森電燈株式会社が寒水沢発電所・矢別発電所を増設。
- 大正5年(1916)
合名会社藤田組が福島県の広田製鋼所で合金鉄の生産を始める。青森電燈株式会社が上松沢発電所を増設。
- 大正6年(1917)
合名会社藤田組が鉱山部門を藤田鉱業株式会社として分離。
- 大正7年(1918)
合名会社藤田組が電気製鋼および低燐鉄の生産にも乗り出す。青森電鍊所設置(1月)。第一次世界大戦終結(11月)。
- 大正8年(1919)
合名会社藤田組は、釣屋浜に選鉱場を設けて二枚橋の砂鉄を採取し、関根浜にも同様の操業を行った。藤田組製材所創立(10月)。
- 大正9年(1920)
青森電鍊所閉鎖。
- 大正11年(1922)
「青森電鍊所」が記された実地踏査青森新市街図が発行される。
- 昭和12年(1937)
合名会社藤田組と藤田鉱業株式会社の合併により株式会社藤田組設立。
- 昭和13年(1938)
「藤田組通り」が記された新版青森市街全図が発行される。
- 昭和20年(1945)
株式会社藤田組が商号を同和鉱業株式会社に変更。
- 昭和25年(1950)
荒川産業株式会社設立。
- 昭和43年(1968)
5月16日に発生した十勝沖地震によって青森電鍊所跡と思われるレンガ壁倒壊。